

人間は何ものなのでしょう

【聖書】詩編8編 1～10節

【指揮者によって。ギテイトに／合わせて。賛歌。ダビデの詩。】

主よ、わたしたちの主よ／あなたの御名は、いかに力強く／全地に満ちていることでしょう。天に輝くあなたの威光をたたえます 幼子、乳飲み子の口によって。あなたは刃向かう者に向かって砦を築き／報復する敵を絶ち滅ぼされます。あなたの天を、あなたの指の業をわたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なされたもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは／人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう／あなたが顧みてくださるとは。神に僅かに劣るものとして人を造り／なお、栄光と威光を冠としていただかせ御手によって造られたものをすべて治めるように／その足もとに置かれました。羊も牛も、野の獣も 空の鳥、海の魚、海路を渡るものも 主よ、わたしたちの主よ／あなたの御名は、いかに力強く／全地に満ちていることでしょう。

【序】夜空を仰ぐ

やっと梅雨明けになったようです。集中豪雨の被害が各地に起りました。自然の恐ろしさに為すすべを持たない私たち人間の無力さを思い知らされます。かけがえのない者の命を失われた方々の悲しみは、如何ばかりでしょうか。被害を受けた方々の難儀は如何ばかりでしょうか。一日も早く復旧が進むよう願います。

今日の詩編8は、満天の星空を仰いで詠われた信仰の歌です。人工の光が溢れる大都会では、星空が貧弱ですが、遠く離れた海辺や高原に行きますと、夜空が本当に美しいものです。10年暮したシンガポールも都市国家ですから、夜空は満天の星とはいきませんでした。しかしマレーシアやインドネシアのリゾート地に出かけますと、空から星がこぼれてくるのではないかと思える夜空でした。

「あなたの天、あなたの指の業をわたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なされたもの」。神さまはこの広大な天を創造なされたのです。無数にきらめく星は、まさに神さまの美しい指の業なのです。この無数の星が衝突事故を起こさないのは、神さまがちゃんと配置なされたからに違いありません。神さまはこの広大な天ばかりでなく、地と地上に住むものすべてをも創造なされた神さまなのです。

パウロが哲学の都アテネを訪れて驚いたのは、様々な神が祀られている祭壇が無数にあることでした。「知られざる神に」と刻まれている祭壇さえありました。そこで彼は「知られざる神」と刻まれて祭壇に祀られている神を知らせましょうと、人々に語りました。「世界とその中の万物を造られた神が、そのお方です。この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません。また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神だからです」(使徒 17:23～25)。

神さまは、天地万物の創造者——ですから人の手で造った神殿にお住みになったり、人の手によって仕えてもらう必要もないお方——これが聖書の信仰の第一です。このような信仰を、私たちの周りの方々は、しっかりと持っているのでしょうか。私たちは天地万物を創造された神さまを、明確に伝えていかなければなりません。

[1] 何ものでしょう

「そのあなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう、あなたが顧みてくださるとは。」

広大な美しい夜空をいつまでも仰ぎ見上げていますと、この自分の小ささがひしひしと感じられて参ります。この地上では万物の霊長(頭)だなどと、大きな顔をしていても、この雄大な創造の御業をなさる神さまの前に立つならば、また何と小さな存在に過ぎないのでしょうか。

ところが神さまは、私たちも同じ神さまの手によって造られた被造物なのに、神さまより僅かに劣るものとして造り、神さまの栄光と威光を冠としてかぶらせて、全被造物をすべて治めるという大切な任務をお与えになったのです。ご自分が非常に良いものとして創造された羊も牛も、野の獣も、空の鳥、海の魚、大海獣のすべてを、私たち人間にお托しになっているのです。このように御心に留めてくださるとは、いったい私たち人間は何ものなのでしょう。

神さまの憐れみ以外にありません。小さなものに過ぎないのに憐れみによって顧みられて、大切な任務を托されているという驚きと畏れを忘れず、感謝して謙遜に責任を果たしていかなければなりません。そこでイスラエルの人々は、夜空を見上げて、天地を創造された主なる神さまの力と愛にふれ、謙遜にされて御前にへりくだり、「主よ、わたしたちの主よ、あなたの御名は、いかに力強く、全地に満ちていることでしょう」との讚美の 合唱を繰り返したのです。

[2] 楽園を失う

「神に僅かに劣るものとして人を造り、—— 御手によって造られたものをすべて治めるように、その足もとに置かれました」。 私たち人間は、神さまが創造されたものを、すべて治める任務を与えられました。しかし私たちは神さまと対等な者ではありません。神さまの代理人として栄光と威光の冠を戴いているとはいえ、その冠は神さまから戴いたものです。他の被造物に比べて、優れた知恵・技術・文化を持つとはいえ、神さまより劣るもの、その支配の下にあるものには変わりはないのです。

神さまは私たち人間に、エデンの園を耕し、守るようにとお命じになりました(創世記 2:15)。「耕す」とは「仕える」、「守る」とは「愛する、助ける」という意味も持つ言葉です。決して自分の意のままに権力を振るって支配することではありません。しかしアダムは神さまに聞き従って善悪を判断せず、自分の判断で耕し、守ろうとする罪を犯したので、楽園を失う結果になってしまったのです。

樂園を失った人間家族の間で先ず起こったのが、兄が弟を殺してしまうという悲劇でした。そして世界は、弱い者小さな者が虐げられ、戦争・殺し合いが絶えず、自然環境が破壊され、全被造物がうめき苦しむ世界(ロマ8:22)になってしまったのでした。今日の世界には、全被造物のうめき、苦しみが満ち溢れています。これは私たち人間の神さまに対する不従順・罪の結果にほかなりません。この事実を、私たちは、自分の責任として、しっかりと自覚しなければなりません。

しかし「人の子は何ものなのでしょう、あなたが顧みてくださるとは」とこの詩編の作者が歌った、私たち人間に対する神さまの愛は変わりませんでした。そして救い主イエス・キリストをお送りくださったのでした。イエスさまはおっしゃいました。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(ヨハネ 3:16)。世を愛された——人が救われなければ全被造物は救われません。御自分が非常に良いものとして創造された全被造物を愛されるが故に、神さまは人間をお救いになろうとなさるのです。

私たち人間は、他の被造物より優れた者として造られました。それは神さまに代って、すべてを治める務めを果たすために他なりません。私たちは、天地万物の創造主である神さまの前で、自分の傲慢さを悔い改めなければなりません。小さな者でしかないことを謙遜に自覚して、神さまに聞き従う信仰を取り戻さなければなりません。

[結] 人間は何ものなのでしょう

「全世界を創造されたあなたが、御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう」。無に等しい小さな者を顧みて、御手によって造られたものをすべて治めるように、足もとに置いてくださった神さまのご配慮に、畏れと感謝をもって、応答しなければなりません。正しい自己理解は、正しい神理解からもたらされるのです。神さまを見失う時、私たちは自分を失う危機に陥ります。

ちょっとした気象の変化で集中豪雨があると、山が崩れて人家を押しつぶします。危険な地域まで人間が宅地を造成して暮らそうとした結果ではないでしょうか。川が氾濫して、河原を駐車場にしていた大型トラックが玩具のように押し流されてしまいました。私たちは自然の大きな力に恐れを抱いて、小さな存在に過ぎない自分をよくよく自覚して、自然の中で暮していかなければならないのではないのでしょうか。

神さまが創造されたこの天地の中で、万物の創造主の前に立ち、「人間は何ものなのでしょう」という問を心の中でいつも繰り返して生きていかなければなりません。この小さな存在が、神さまのお造りになった世界を治めるという大切な責任を与られているという畏れと驚きを覚えて、謙遜にならなければなりません。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」。神さまの愛をイエス・キリストに見出し、イエス・キリストと結ばれることによって、全地に満ちている神さまの力と愛をいただき、この世界を守る責任を謙遜に果たして参りましょう。